

<特集 児童期・青年期の支援>

思春期の子どもをもつ親への支援

李 敏 子

1. はじめに

近年、子育て支援に対する関心が高まっているが、そのほとんどは乳幼児期の子育てを対象としたものである。当然のことながら、子どもの成長に応じて親の対応も変化を求められる。子どもが児童期から思春期になると、子ども自身は親からの心理的自立やアイデンティティの確立などさまざまな課題に直面する。そのため、子ども自身を対象とした研究は数多くなされてきた。しかし、思春期の子どもをもつ親の心理的課題と親への支援に関する研究はまだ少ない。思春期の親離れは子離れと相互に関連しながら進んでいくことを考えれば、子どもの自立とともに、親にも子どもへの関わり方に変化が求められることは明らかである。思春期には子どもも悩み苦しむが、親も対応に悩むことが多いのではないだろうか。

水島 (2012) によれば、思春期は「役割の変化」の時期であり、子どもは保護者に従属する立場から独立した大人へと変化していく。それは親にとっても「関係性の変化」、わが子の「異物化」を意味し、衝撃として体験されるという。

思春期の親子関係は、児童期までの親から子どもへの一方的な権威を示す関係から、相互性を持った関係へと相互調整的に変化していく (久世・平石, 1992)。平石 (2007) は、中学生の子どもをもつ母親を対象に面接調査を行い、思春期の子育てで心がけていることとして、「子どもの自我の尊重」「威厳ある姿勢」「適切な心理的境界」「感情統制」の 4 つの側面を抽出した。つまり、子どもを一個の人格として対等に接し、威厳をもち、子どものプライバシーを尊重し、親自身の感情をコントロールするように心がけていることが明らかになった。

さらに平石 (2007) は中学生の子どもをもつ母親を対象に質問紙調査を行い、「子どもの成長に関する認知・感情」尺度と「思春期の子育て態度」尺度を作成して検討した。因子分析の結果、「子どもの成長に関する認知・感情」尺度からは、「肯定的認知・感情」と「否定的認知・感情」の 2 因子が抽出された。「思春期の子育て態度」尺度からは、「不

安定な態度」「威厳ある姿勢」「適切な心理的境界」「主体性の尊重」の 4 因子が抽出された。パス解析の結果、特にパス係数の大きかったのは、「否定的な認知・感情」から「不安定な態度」へのパスと、「肯定的な認知・感情」から「主体性の尊重」へのパスであった。つまり子どもに対して否定的な認知・感情をもっているほど不安定な態度をとりやすくなり、子どもに対して肯定的な認知・感情をもっているほど子どもの主体性を尊重しやすくなることが示された。

親が子どもへの否定的な認知により不安定な態度をとると、子どもの側にも否定的反応が生じやすく、いっそう親も否定的な認知に傾くといった悪循環が生じやすいと思われる。このことは思春期の非行や問題行動に、よく見られる現象ではないだろうか。

本稿では、思春期の子どもに対して親が陥りがちな状況と親への支援のあり方について述べたい。事例については、本質的なエピソードを複数の事例から抽出して合成していることをお断りしておく。

2. 子どもの主体性を育てること

思春期に子どもが主体性を確立するには、それを促進するような親の姿勢の変化が重要である。児童期までは、親が子どもに指示することが多いが、思春期になると、親は自分の意見を押しつけるのではなく、子どもの主体性を尊重して意見を聴くというように、子どもへの関わり方を対等なものに変化させていくが必要になる (李, 2012)。さらにさかのぼれば幼児期から、子どもの気持ちを尊重し共感する親の態度が、子どもの主体性の確立を促進する。思春期以降の主体性の確立が困難な人は、幼児期からこのように共感される体験が不足していたことが多いように思われる。

面接で出会う親は、子どもの何らかの問題行動をきっかけにして訪れることが多い。ある思春期の子どもが不登校になり、家に閉じこもるようになった。母親は時々「お母さんのために学校に行って」と子どもに訴えかけた。また、子どもの将来への不安を感じると、自分のうちにとどめて

おけず、不安をすべて子どもに吐きだした。話し出すと止まらず、しつこく言い続けた。そうすることで子どもを学校に行かせようとしたのだが、子どもはダメージを受け無力化されていった。子どもの病状は悪化し、登校どころではなくなった。この時、母親は「子どもが自分の思い通りにならないことがあることを、初めて知った」と語った。

実際に母親はそれまで子どもを自分の思い通りにしてきた。自分の思いをしつこく言い続けたり、子どもに適当に嘘をついて思い通りに行動させてきたのであった。母親の夢は子どもを高学歴エリートにすることであり、子どもが勉強せずにテレビを見ていると、いきなりテレビを消した。不登校になった後、子どもは長い年月を無気力に過ごすようになった。子ども自身の主体性は育っておらず、何か都合の悪いことがあると「親のせい」と責任転嫁した。子どもの内面は空虚で殺伐としていた。「自分は親の操り人形だった」と言う。

特に子どもが成績優秀で受験に成功し有名進学校に通っているような場合に、親の願望はエスカレートし、子どもが高校生になっても、さらには大学生になっても、親は自分の期待通りに子どもを支配しようとする傾向が見られる。そのような親は「子どもに～塾に行かせ、～中学に行かせ、～高校に行かせた。～大学に行かせ、～の資格を取らせ、～に勤めさせようと思う」など、親が「～させた。～させる」と、親の意思で子どもの進路を決めてきた、これからも決めると、平然と語った。子どもの方は「親が～と言ったから～した」と受動的に語るのであった。

子どもの人生の主体はだれなのかと疑問に感じるほど、子どもの人生は親の願望に支配され、親の自己愛と虚栄心を満たすための手段となっていた。子ども自身の意志や主体性は、そのような支配・被支配の関係のなかでは育ちようがなかった。このような生育史をもつ子どもは、思春期以降、不登校・ひきこもりや何らかの精神疾患になる可能性が高いと思われる。思春期の課題であるアイデンティティや主体性の確立につまずくのである。

親が子どもを別人格として尊重し、子どもの意志や判断を尊重しなければ、子ども自身の主体性が育つことは難しい。思春期以降、親は徐々に、子どもの自主性に任せて見守り、後方支援に徹していく節度が求められる。

このように、思春期以降は親の子どもへの関わり方が変化が求められるが、少子化と親の経済的・時間的余裕がふえた社会の中で、自分自身の願望に執着する親がふえているように思われる。「勝ち組」「負け組」という言葉に象徴

されるような格差社会では、親の不安が強まり、いっそうこのような傾向に拍車がかかるだろう。

実際に、高校生までは、塾の送り迎えなど身のまわりの世話は親が請け負い、子どもは勉強以外のことは免除されるため、心理的自立の課題は先送りされる。大学生においても、遠く離れた大学に子どもが進学した後でもしばしば大学を訪れ、子どもへの配慮や対応を要求する「ヘリコプターペアレント」が増加しているという(多賀、2008)。「ヘリコプターペアレント」とは1990年代のアメリカでの社会現象にメディアが与えた呼称であり、常に上空を旋回し、わが子が助けを求めるとすぐに地上に降りていって救援活動を行うイメージが「ヘリコプター」に例えられたのである。この現象が10年ほど遅れて日本でも見られるようになった(高石、2010)。さらに現在では、「親子就活」と言われるように、「子育て最終決戦」(田宮、2012)として、子どもの就職活動に親が介入・干渉することが増えている。

思春期は「夢こわし」の時期と言われる。子ども自身、今までもっていた夢や願望をそのままかなえることは至難なので、現実の自分の能力や適性などに応じて夢を修正していかなければならない。これは抑うつを伴う困難な作業であるが、その作業を通じて自分にふさわしい社会の居場所を見つけていくのである。親も同様にして、子どもを別人格をもつ個人として受けとめ、親の夢や願望を押しつけることをあきらめていく作業が必要である。

たとえば不登校児の親面接において、最初は親も不安から子どもの行動を支配しようとするが、その時期を過ぎると徐々に子どもの現状を受け入れられるようになる。それと同様の変化が、思春期の親に求められるのではないだろうか。この親の変化は、子どもの反抗、問題行動や挫折体験をきっかけにして生じることが多いと思われる。

子どもの主体性を育てるには、それを可能にするような親への支援が必要なのである。母親自身の不安が強いため子どもを思い通りに動かそうとする場合には、母親がその不安をコントロールできるようにサポートしていくことが大切である。

3. 子どもの性的発達への受けとめ方

思春期の息子に性的発達が見られた時に、強い嫌悪感を表明する母親が少なからずいる。どう対応していいかわからないという戸惑いだけでなく、生理的嫌悪感に近い拒絶感を示すことさえある。母親自身が厳格な家庭で育ち潔癖

症であったり、母親自身の母親が性的に奔放であったのを思春期に見て嫌悪感をもっていたりと、母親自身の生育史に根差すケースが多いように思われる。このような母親に、不安や嫌悪感を十分に話してもらって、子どもの自然な成長を受け入れていけるようにサポートすることが大切である。

また、発達障害をもつ子どもは異性への関心や性同一性、恥じらいという社会的感情の発達が遅れていることが多い。そのためもあると思うが、息子が小学校高学年になっても母親と一緒に風呂に入っていたり、裸で家の中をウロウロ歩くことが日常的になっていることがある。息子が中学生になっても、母親にべたべたしてキスをしたり、母子一緒に寝ていたりすることもある。

このように、発達障害児は性的発達の面で幼いために、つい母親も息子を幼い子どものように扱ってしまいがちであり、適切な心理的境界をもていないように感じられることが多い。子どもの性的発達に関しては、親の方が子どもの年齢相応の対応を心がけて、子どもに一般的な社会的に望ましい姿を教えることが重要である。子どもの自発的变化を待つのではなく、親が子どもの年齢相応の対応をするようにと助言することが多い。

4. 子どもへの依存

たとえば専業主婦で子育てに自分の人生をかけてきた母親の場合、子どもの自立と親離れは大きな喪失感を伴う。そのために、無意識的に子どもが自立して離れていくことを妨げる行動をとりやすくなる。親自身が子どもと一体化し依存しているのである。このような状況で、大人になっても母の支配と束縛から逃れられずに苦しんでいる娘は多い(斎藤、2008)。

ある母親は、娘が恋愛するたびに反対し、デートに出かけた娘の携帯に何度も電話したり娘の携帯を盗み見したりして、娘の恋愛をぶちこわすことを繰り返した。あるいは、いろんな理由をつけて娘の結婚を妨害する母親もいた。子どもが結婚した後でも、子どもを助けてあげるという名目で、子どもの生活に干渉し続け、その後は孫の世話を口実に干渉し続ける母親も多い。あるいは、親自身が寂しいために、娘が離婚して実家に戻ってくことを、半ば望んでいるような場合もある。子どもが自立して離れていったら親の人生が成り立たなくなるから、いつまでも子どもにしがみついたのである。

特に夫婦関係が悪い場合に、このような子どもへの依存が生じやすいように思われる。夫婦が不仲である場合、夫婦の問題は夫婦で解決するという世代間境界があいまいになり、母親は夫に頼れない分、子どもに頼ることになる。母親が夫への不満を娘に話したり、息子を夫代わりに頼ることになりがちである。このような子どもは親の世話役となり、親から離れて自分の人生を生きることに罪悪感を覚える。あるいは、父親が娘を妻代わりにし、妻との関係で満たされない思いを娘に投げかけることがある。この父と娘の关系到性的な色彩がまじると、性的虐待とまではいなくても、娘が異性との関係を築くのを妨げることになる。無意識的に、親は子どもを束縛して子どもの自立を妨げているのである。

夫婦の関係が良い場合には、夫婦で会話や行動をともにすることで、子どもの自立に伴う寂しさを癒しやすいだろう。また、子どもが思春期以降になれば、母親は子育て以外の友人関係や趣味の世界、活動などの時間をできるだけ増やしていき、子どもにかまわなくても自分の時間を過ごせるように、母親自身の生活を築いていくことが大切と思われる。

乳幼児期には、母親は子どものためにほとんどの時間を費やす。しかし、子どもの成長とともに、徐々に自分自身のための時間をもつことが大切である。親自身が子どもから自立しなければ、子どもが親から自立するのは困難であろう。

高石(2010)は大学の学生相談において、「親は、子どもとの心理的距離が非常に近く、親もまた子どもからの『自立』への支援を必要とする成長途上にある」とし、保護者支援において「親ならこうあるべき」という姿勢で臨むのではなく、「親も支援を必要としている」という視点をもつことが重要であると述べている。援助者は親と子の「分離と自立の過程を支えていく」が、その際に「こころの痛み、傷つき、悲しみ、怒り、といった否定的な感情や衝動を、援助者が、共に感じ、受け止めていく作業」が必然的に伴うという。

親には親自身のこれまでの生き方、生活、価値観があり、急に変えることは難しい。援助者はそのような親のあり方を尊重しながら、依存対象を失う親の悲しみや不安、空虚感を受けとめ支えていくことが重要である。青年期の自立とは、子どもが単に親から離れるだけではなく、子どもの依存対象が親から友人や恋人へと移行していくことに他ならないことを考えると、親にも他の依存対象への移行が必

要になるだろう。

5. 子どもへの否定

大学時代に対人恐怖などで相談に来て、その後の就職がうまくいかずひきこもりがちになった成人男性に共通していることとして、特に父親から否定されてきた生育史があるように思われる。「男は～すべき」という父親の価値観や理想があり、それをかなえられない息子を否定するのである。父親が息子を「できそこない」と罵倒するようなこともある。いつも父親から否定されてきた男性が、自信をもって社会に出ていくことは難しいだろう。

日本の場合、大学卒業後の新卒の時期にうまく就職できなかった人は、その後の中途採用で正規雇用となるのはきわめて難しい。このような社会状況が、再起を困難にしている。大学生の時にカウンセリングを始め、新卒時の正規雇用がかなわなかった人たちは、その後20年が過ぎてなお、失業中であつたり、不安定な雇用形態であることが多い。40歳を過ぎて、精神障害者の手帳をとって就職しようとしても、非正規雇用がほとんどであり、自力では生活できないのが現状である。

ひきこもりの人は、もともとコミュニケーションが苦手であることから、採用試験や面接などのハードルが高く感じられ、脅えて尻込みしてしまうことが多い。しかし、「簡単に就職できるところがあったら、就職したいですか？」ときくと、たいていは「それなら就職したい」と答えるのである。決して働く意欲そのものがないのではなく、就職に至るまでのプロセスが不安であるために、最初の一歩すら踏み出せないでいる。最近是不況であるため、少ない求人にも多くの人が集まり競争率が高い状況があり、ひきこもりの人はますます最初の一歩を踏み出しにくくなっている。この状況は障害者の雇用の枠においても同様であり、契約社員やパート勤務でも倍率が高く競争に勝ち抜かねばならない。

このような社会状況が、ひきこもりの社会的増加と長期化を生み出しているように思われる。大学時代から始まって長期に支援を必要とする人を見ていると、決して病理が重いわけではなく、競争社会で勝ち抜くために必要とされる「胆力」「勝気」、あるいは少しのことではへこたれない「鈍感さ」や「打たれ強さ」とでもいうものが弱く、またタイミングを逃してしまったために、社会適応がうまくいかず、長期化してしまっている場合が多いように思われる。

6. おわりに

ある長期のひきこもり体験者が、親に対する意見として、親は自分の言葉で話してほしい、「時代が」「世の中は」「お父さんが」「主人が」というのではなく、「わたしは」で話してほしいと述べていた（和田、2002）。「親が本音で生きてくれば、きっと子どもありのままの自分を出して生きていけるようになる」と。

思春期以降は、一方で親として子どもへの保護は必要であるが、親も一人の人間としての生き方を示し、親子であっても個人と個人として尊重しあい会話する関係が求められる。親が子どものためにのみ生きることで、子どもの成長を妨げるものはないと思われる。子どもは親の所有物でも分身でもない。自分自身の夢は、だれかを通じてではなく自分でかなえようとする節度、自分自身の中で自分の夢と折り合いをつける謙虚さが、親には必要ではないだろう。

引用文献

- 平石賢二（2007） 思春期の子どもをもつ親の心理的ストレスと子どもの人格発達に与える影響 平成15年度～平成18年度 科学研究費補助金（基礎研究（C））研究成果報告書
- 久世敏雄・平石賢二（1992） 青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学教育学部紀要, 39, 77-88.
- 李 敏子（2012） 臨床心理学キーワード 臨床心理学, 72, 879-882.
- 水島広子（2012） 思春期の意味に向き合う 岩崎学術出版社
- 斎藤 環（2008） 母は娘の人生を支配する 日本放送出版協会
- 多賀幹子（2008） 親たちの暴走一日米英のモンスターペアレント 朝日新書
- 高石恭子（2010） 学生期の親子関係と大学における親支援のあり方について 甲南大学学生相談室紀要, 18, 49-58.
- 田宮寛之（2012） 親子で勝つ就活 東洋経済新報社
- 和田俊彦（2002） ひきこもりという感性を生きて 森口秀志・奈浦なほ・川口和正（編著） ひきこもり支援ガイド 晶文社, pp.54-60.